

特集 3

イヌの気質を 遺伝子解析と実態調査で 総合的に解明

とにかく牛が好きで好きでたまらない、牛の病気を治す仕事に就きたいと考えていた増田宏司さんは獣医を志した。大学では牛の発情を誘起させる研究を行い、その分析がうまくいき研究の面白さに取り憑かれてしまい、研究者の道を歩むことになった。大学院で出会ったのが、大嫌いであったイヌを研究対象とした遺伝子の研究であった。嫌いな動物を対象に研究せざるをえなかった背景、研究のねらいや夢を増田さんに伺った。

とにかく牛の病気を 治したかった

「愛媛の酪農地帯で育ちましたので、牛を目にする機会が多く自然に牛と関わる仕事に就こうと物心ついた頃から漠然と考えていました。そこで同じ酪農地帯である山口大学に入学しましたが、獣医学科では3年生までは比較的暇でしたからアルバイトばかりしていました。3年生になり卒論のテーマを与えられました。それが『キトサンによる牛の発情誘起に関する研究』です。実は、この卒論研究が素晴らしくうまくいき、研究が一気に好きになってしまいました。そして、博士課程に進学しました。」

卒論で研究が面白くなったということは非常にラッキーだったと思いますね。この卒論の研究をさらに続けようと大学院に進学したと思いますが、実際にはイヌの遺伝子の研究に方向転換させられましたね。その辺の事情と現在の研究内容を教えてください。



東京大学大学院農学生命科学研究科獣医動物行動学研究室
増田 宏司 研究員

イヌ嫌いを克服した今になって、 イヌの研究をすることになるとは 思ってもみませんでした

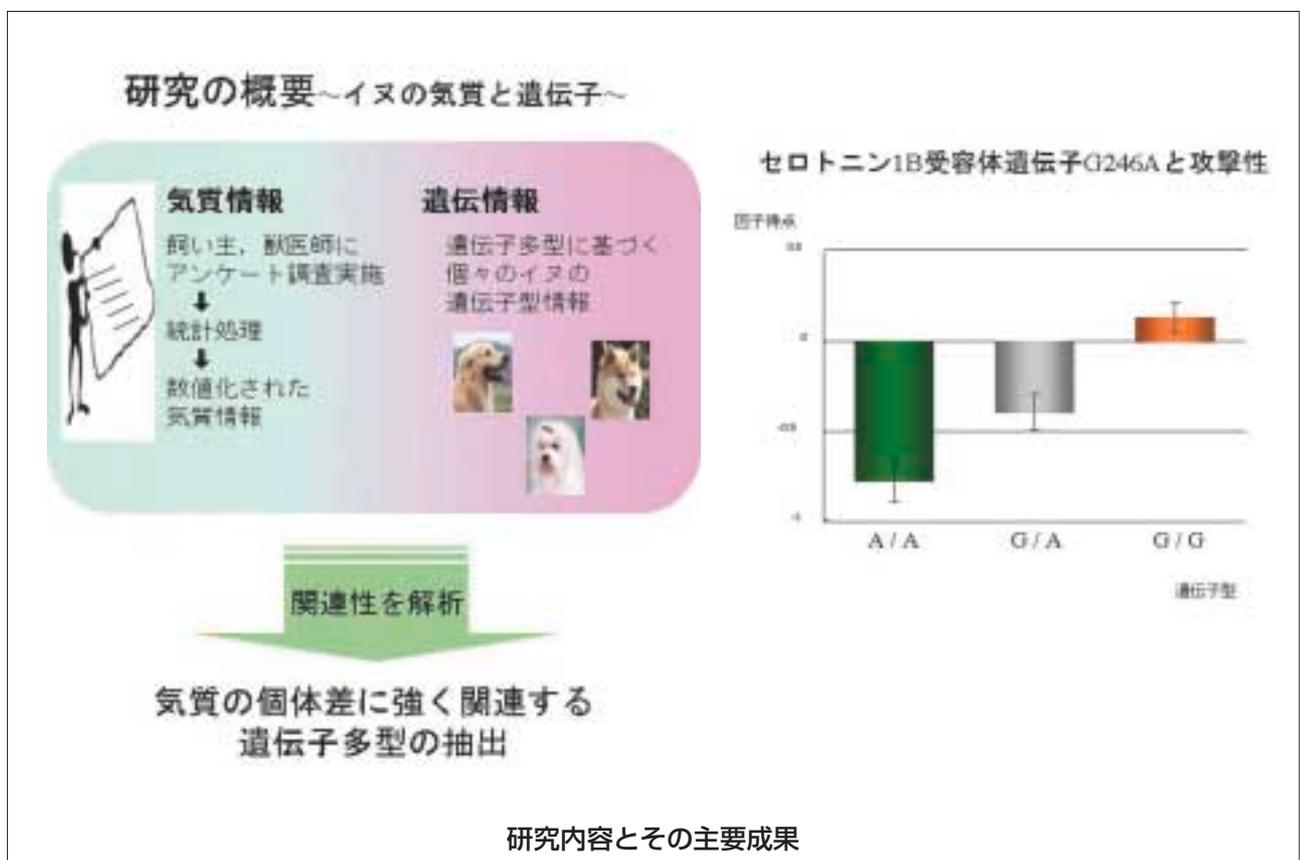
「私の実家の近所には狩猟をする人が多くて、たくさんのお犬が飼われていました。その鳴き声が、朝から夜までうるさくて本当に嫌でした。それに、何回もイヌに追いかけられたことがあります。また、馬も嫌いですが、これは獣医学科での実習の度に私だけがよく蹴られたの

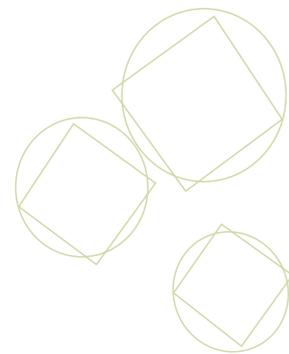
が理由です。大学院で私が所属した研究室では、新たにイヌの遺伝子解明に関する研究に取り組むことになりました。当時私は1年生で一番長くこの研究を続けられるだろうということで、研究チームに入れられました。その頃にはイヌ嫌いは克服していましたが、イヌが大好きになっていました。遺伝子の研究でしたので、それほどイヌに接する機会はありませんでした。

現在は、『イヌの気質に関連する行動遺伝学的研究』を行っています。ご存知の通り、イヌには多くの種類があり、大きさ、姿、そして行動特性も様々です。イヌの行動を左右する特性は気質と呼ばれています。この気質に影響を与える遺伝的要因を解明するのが研究の目的です。

もし、こうした特性が解明できれば、盲導犬や聴導犬の効率的な選抜や、飼い主の希望や性格に合った犬種や個々のイヌの選択提案に役立つ遺伝子マーカーが発見できるかもしれません。もちろんイヌの性格を左右するのは遺伝要因だけではなくありませんから、飼い主によるしつけといった環境要因も大切です。私の研究は、イヌの遺伝子の違い、中でも遺伝子多型に注目し、飼い主や獣医師から得た気質情報との関連性、つまり性格の差に影響を与えている遺伝子多型を検索するというものです。

また、遺伝子だけでなく、イヌの気質を飼い主や主治医である獣医師から情報収集して数値化して分析します。」





イヌというのはヒトとともに歩んできた最も身近な動物であり、その関係はこれからも永遠に変わらないと思います。増田さんは今後ともイヌを対象として研究を続けていくのですか。また、その場合は、どのような課題に挑戦しようと考えていますか。

リタイアした盲導犬と高齢者相互のセラピーの可能性を研究したい

「私はこの6年間、イヌに関する研究を進めてきました。気質に関する研究もちろんですが、盲導犬など、使役犬の育成に関する研究プロジェクトにも関わっています。しかし、盲導犬などの育成に関する研究はたくさん行われていますが、盲導犬のリタイア後のケアに関してはほとんど研究が行われておりません。日本は世界一の高齢化社会ですので、リタイアした盲導犬による高齢者へのアニマル・アシステッド・セラピーと同時に、高齢者による高齢犬へのヒューマン・アシステッド・セラピーが可能になることを目的とした研究を行いたいと思っています。」

食料生産とは異なる側面から動物と人間との望ましい関わり方を教育研究することは、新しい分野であり、増田さんもそうした経験はほとんどないと思います。こうした新しい分野での学生教育について、どのような夢もっていますか。

99回の失敗に感動して欲しい

「私は大学という場所は、研究機関、教育機関であると同時に、社会というステージへ飛び立つ前の控室のような役割ももっていると思います。そのために、大学で



リタイアした盲導犬の活躍の仕方を研究したい

はヒトとしての常識を身につけていただきたいと思います。私たちは動物を相手に研究を行っていますが、研究だけではなく、仕事も、ヒトとヒトとのつながりがなくては進めることはできません。目の前にあるものに興味を持つことのできる目と、それに感動できる目、そして自分の足りない点に気付いて、それを素直に受け止めることのできる気持ちを養っていただきたいと思います。

また、研究では、1回の成功に対して99回の失敗があります。こうした99回の失敗には必ず意味があります。そのため、1回1回失敗することに感動してほしいと思います。」

(聞き手：栗原ちとせ)